SHAKE ART!

SINCE2009-KANSAI ART UNIVERSITY

TAKE FREE
VOL.13
2014.APR

GRADUATION WORKS EXHIBITON

KYOTO CITY UNIVERSITY OF ARTS
KYOTO SEIKA UNIVERSITY
KYOTO UNIVERSITY OF ART & DESIGN

卒業制作 それぞれのストーリー
卒業制作展ピックアップ

井上明彦

1984　京都大学大学院博士課程中退
　　グラフィックデザイナー、岡山大学教養部助教授（美術）
1995 ～　京都市立芸術大学美術学部助教授（造形計画）
2006 ～ 07　文化庁新進芸術家在外研修員としてパリ滞在

1990 年代から各地で個展やグループ展、アートプロジェクト等を行う一方、近年は高速道路工事で壊された古民家の土塀の土を再活用する「つちのいえ」プロジェクトを進めている。
http://www.akihiko-inoue.com/

井上先生の中にある教師と作家の 2 面について質問してみました

TEACHER

Q. 先生はいつも授業でどんなことを教えていますか？また学生にどんなことを伝えたいと思っていますか？

A. 人間がつくったシステムはすべて作り変えることができる。モノの見方も考え方も価値観も制度も。アートのなかにはそのためのヒントがいっぱい詰まっているということ。

Q. いつもは教えている側の先生ですが、ここ最近で逆に学生から教わったことはありますか？

A. 学生の思考や感覚はいつも新鮮で、教えているという意識はなく、一緒に何かを探り、確認している感じ。特に最近、経済学にも関心を持たないと駄目だということを教わりました。

Q. 先生の一日を教えてください。

A. 日によってまちまちですが、八～一〇時起床。パンとミルクの朝食。授業／授業のないときは制作、研究。質素な昼食。午後も授業／授業のないときは制作、研究。夕食後、制作、研究。深夜一～三時に就寝。

ARTIST

Q. 好きなアーティストは誰ですか？

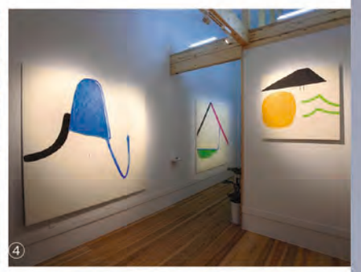
A. 古典的ですが、美術ではマチス、建築ではル・コルビュジエ。

Q. 作品のアイデアはいつ生まれますか？

A. アイデアというのは、だいたい無関係なものが突然結びつくショートから生まれます。僕の場合それは移動中に起きやすい。周りの知覚が移り変わる移動は大事な経験です。後は風呂に入っているとき。意味とイメージが遊離状態にあるからかなと考えますが、よくわかりません。とにかくノートが手放せません。

Q. 十年後の予定をお聞かせください。

A. 一～二年後のことも想像できない行き当たりばったりの人生。でもできれば西アフリカで大工として働きながら、大地から直接つくりだした自然素材で絵を描きまくる。



①AgarAgar　②光る影　③光のへや　④ふたしかな屋根

先生のジグザグアート人生論

AKIHIKO INOUE

様々な学年が交わり制作し学ぶ「造形計画」や、自分たちの手で学内に自然素材や廃材を用いて家を作る「土の家プロジェクト」など、面白い授業を行っている京都市立芸術大学の井上明彦先生。今回は作家としても活躍されている先生の学生時代のエピソードとともに、今美術を志す学生に向けてお話をいただきました。

Maison-Arche ＋ 御守り工房

ジグザグ

先のわからない方が楽しいよ、人生も、制作も

京都市立芸術大学で造形計画という科目を担当しています。教員でありながら、学校嫌いで教師の自覚がほとんどなく、自分に刺激を与えてくれるクリエイターの出現を楽しみにしているだけの人間です。（＊造形計画については、http://www.akihiko-inoue.com/lab.html 参照）

この SHAKEART! は、美術を学ぶ学生が大学の枠を越えて自前でつくっているフリーペーパーと聞きました。二〇〇九年創刊というからもう五年目。学生主体だからメンバーは次々交代する。ということは、コンセプトが五年も共有され受け継がれている。すごいなと思います。ぼくの学生時代なら、せいぜいもって一〜二年。ネットのせいでしょうか、今は熱く濃い短期型ではなく、淡くて緩い長期型の人間関係になっているのでしょうか。

原稿を依頼してきた編集部の川久保美桜さんが面白いことを言ってました。一般大学の学生は、人とつながったり話題についていくことにあくせくしているけれど、美術を学ぶ学生は、ひとりでいることを楽しめると。これもすばらしいと思います。ひとつの話題に大勢で群がるのではなく、自分の世界を持ち、単独行動を楽しめる少数の者どうしが出会い、複数の問題意識をキャッチボールし合う。本来なら、そういう交流のあり方がどの分野にもあるべきなのにね、という点でも川久保さんと意見が一致しました。

さて、「学生に伝えたいこと」というテーマですが、実はぼくの学生時代はめちゃくちゃでした。家が貧乏で、親から経済的に独立したいために、学校にほとんど行かずアルバイト三昧、音楽活動（ブルースバンドでドラム担当）に明け暮れていました。美術について何かを先生に教わった記憶がありません。学外の現場でデザイン技術を身につけ、大学の先生ではない「一〇〇％アーティスト」からじかに教えを受けました。今は美術家というとほとんどが学校や大学で教員をしていますが、美大の数も少ない昔は、大学に属さない美術家があちこちにいました。デザインの現場や無頼のアーティストたちの間に身を置くことが自分なりの学び方でした。つまり自分の「美術学校」が大学などの制度の外にあったのです。こまごました決まりごとが増えた今の世の中では、こういう学生生活は想像しがたいかもしれません。

そもそもぼくは美術とは縁遠い人間でした。美大生というと、一般的に小さい頃から絵が好きで、芸術にそれなりに理解のある家庭環境に育ち、そのまま好きな道に進んだ人が多いと思います。芸大の学生と接していると、育ちがいいなあ、とよく思います。ぼくも魚類図鑑の絵を全部描き写したりするお絵描き工作少年だったのですが、父は高卒の旋盤工でインテリが大嫌い、貧乏長屋の家には父の趣味の「将棋世界」以外一冊の本もなく、「大学なんか行くな」という家庭でした。実家は大阪市東住吉区中野で、小学生時代は、まだ家のまわりに広がっていた田んぼを走り回るガキ大将でした。大阪人なのに、草や土にまみれ、蛇を振りまわし、ため池に浮かべる舟をつくって遊ぶ野生児だったのです。そういう環境は中学時代には都市開発とともに消えてしまいました。思えば、子ども時代のしあわせな自然との交流とその喪失感が今の美術活動の根っこにあるかもしれません。中学時代はコンプレックスのせいで完全にぐれて、鑑別所に行ったことを自慢する番長と仲よくなり、他校の生徒と喧嘩を繰り返す不良でした。美術の先生が暗いシュルレアリスム風の絵を描く画家で、その陰湿な先生が大嫌い、そのまま美術も大嫌いになりました。

不良の友だちの多くは高校にも進学しませんでしたが、高校に行ったぼくは柔道に夢中になり、毎日相手をどう倒すかしか考えていませんでした。愛読書は『姿三四郎』、体育と理数系が得意で、国語は苦手、将来は漠然と工学部。早熟な生徒会の連中が制服反対運動をすると、自分は頭を丸刈りにして詰め襟のボタンを一番上まで留めて学校に行く。美術系や文系の人は一般に自我形成が早いように思いますが、それに対してぼくは、自我や内面の形成が大変遅かったのでしょう。子どもの頃に浸っていた表現の悦びに再び回帰したのは、高三の文化祭で演劇の演出をしたときでした。密林王ターザンをもじった筋書きを考え、舞台セットをつくっているとき、何かワクワクするなつかしい陶酔感におそわれたのです。でもその舞台は、当時ひそかに好きだった女子生徒（田中さん）に演じさせたヒロインの前で、猿役の友だち（片平君）が尻尾をわいせつに立たせるという筋書き外の演技に及んだために、田中さんにめちゃ嫌われてしまうという、散々な結果に終わったのですが。。。

学生時代にやったアルバイトを三つ紹介します。ひとつは、夜逃げの後始末。夜逃げの情報が入ると、そのアパートに行ってドアをこじ開け、中の家具類に「差し押さえ」の札を貼ってまわる。電気が止められているので冷蔵庫の中身が腐り、散乱した服や布団の上になんともいえない腐臭が立ちこめています。このとき「部屋の死体」がどういうものかを知りました。もうひとつは、河原町荒神口角にあった伝説のジャズ喫茶シアンクレールでの給仕のバイト。お客にコーヒーを出し、リクエストに応じてジャズのレコードをかける仕事ですが、同じコーヒーを何度も煮立てながら、四〇〇〇枚以上あったジャズのレコードをすべて聴きました。三つ目は、学生時代の終わり頃、真冬の八瀬でやったシイタケ栽培のアルバイト。朝早く凍てきった林の中で、クヌギの原木に規則的に穴を空け、木づちで種駒をコーン、コーンと打ち込んでいく仕事です。そのころぼくは美術を続けていくかどうか、将来に迷っている頃でしたが、雇い主のおばあさんがたまたま手相見が得意で、見てもらいました。そうしたら、意外にも「あんたは好きなことを続けて行ける。でも目に気をつけなさい。」と言われました。まだ自信などないときだったので、そのときのうれしさと不安が入り交じった気持ちは今も忘れられません。

その後もジグザグして、美術がやはり自分の天職だとわかったのは三〇歳になってから。こんなぼくが今、芸大で教えているなんて、人生、何があるかわかりません。美術を学ぶみなさんに言えることがあるとすれば、「先のわからない方が楽しいよ、人生も、制作も」ということ、もうひとつは、「一人ぐらいこんな人間がいてもいいのでは、という気持ちでやって行こう」です。

最後に、アトリエに貼ってあるピカソの七つの助言を紹介します。

1. 必ずできると信じろ。思いついたことはできる。思いつかないものはできない。これは避けがたく明白なことだ。
2. 限界を越えろ。私はいつも自分のできないことをする。どうやればいいのかわかるからだ。
3. 「そのとき」を待つな。インスピレーションは常に存在する。見つけに行くんだ。
4. 動け。明日に引き伸ばせば、それは死んでしまう。行動がすべての成功の鍵だ。
5. 正しく問え。他の人間はなぜそうなったのかを問う。私はいつも何ができるのか、なぜできないのかを問う。
6. あれこれ判断せず、隠された美を見抜け。脳をぶん投げて、ただ目だけで見ることができればいいのだが。
7. 遅すぎるなんてことはない。若さと年齢は無関係。

ふたしかな屋根：雨宿りするレーニンのための習作